

三位一体論的神学の行方¹⁾

須田 拓

はじめに

20世紀後半はしばしば「三位一体論のルネサンス」と呼ばれる。そもそも私たちの信じる神は、父・子・聖霊なる三位一体の神であるが、その神が三つの位格を持ったお方であることが、西方教会の歴史においてはあまり強調されてこなかったとの反省から、20世紀後半に、その点に注目した三位一体論的
神学（trinitarian theology）と称される試みが開始された。そして、神が三位一体のお方であることが神学全体にどのように影響するのかが探究されてきた。

その流れはたちまちの内に、西方神学全体に広がったが、近年、この流れを見直す動きが起こっている。この三位一体論的
神学への批判は多岐に亘るため、その批判の全てを網羅することはできないが、本論では、そのうち中心
的と思われる点を概観し、その批判にどのように応えるべきかを考えてみたい。

1 三位一体論的 神学の開始とその展開

三位一体論的
神学の開始は、多くの場合、カール・バルトとカール・ラーナーの主張に求められる。

20世紀中頃、カール・バルトは、『教会教義学』I/1で、「三位一体論こそ、キリスト教の神論をキリスト教の神論として、したがって三位一体論こそ確かにキリスト教の啓示概念をキリスト教の啓示概念として、すべての他の神論お

1) 本稿は、2023年9月19日に東京神学大学に於いてなされた後期始業講演の講演原稿に手を入れたものである。

よび啓示概念から、根本的に区別し、ぬきん出させるところのものである」²⁾と語り、我々が信じ宣べ伝えている神が三位一体の神であることに特別の注意を喚起した。またローマ・カトリックの神学者カール・ラーナーも、「経綸的三位一体は内在的三位一体であり、内在的三位一体は経綸的三位一体である」³⁾と語った。永遠における神の三位一体のお姿が、経綸、即ち歴史における神の御業から切り離されて論じられることに警鐘を鳴らし、そのお姿が神の御業の中に表れていることを主張した⁴⁾。このバルト、ラーナー以降、神が三位一体の神であることが信仰全体にどのように影響しているのか、また歴史において三位一体の神の御業がどのように表れているのかが強く意識されるようになり、いわゆる三位一体論的神学が開始されたのである。

その中で、ヴォルフハルト・パネンベルクやユルゲン・モルトマンは、バルトの神学における三位一体論的な展開が不十分であるとした。彼らが特に指摘したのは、バルトにおいて御子と聖霊が、しばしば主体的な役割を果たしていないことであり、特に聖霊がキリストの霊とされることで、その働きが御子に従属する傾向にあり、聖霊の独立した働きが記述されないこと、あるいは、聖霊が神の御業において構造的に役割を果たしていないことである。そして、パネンベルクやモルトマンは、三位格それぞれの独自の御業を記述することを主張した。

パネンベルクも、モルトマンも、位格を「御業の主体」⁵⁾と定義した。そして、例えばパネンベルクは、創造の御業における御子と聖霊の主体的働きを語

2) カール・バルト『教会教義学』「神の言葉」I/2 (吉永正義訳)、新教出版社、1995年、15頁。

3) Karl Rahner, *The Trinity*, trans. by Joseph Donceel, London: Burns & Oates, 1970, p.22.

4) 但し、パネンベルクやモルトマンは、さらに、神の内在的三位一体のお姿が、歴史における経綸に依存するとも語った。

5) Wolfhart Pannenberg, *Systematische Theologie*, Bd.1, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1988, S.416; Jürgen Moltmann, *Trinität und Reich Gottes: Zur Gotteslehre*, München: Chr.Kaiser, 1980, S.33.

った。創造において、御子は御父からの自己区別によって、被造物の存在の可能性を開き、聖霊はエネルギーを与える場としての働きをしていると語った。その試みは、ロバート・ジェンソンやコリン・ガントン、スタンリー・グレンツらに継承され、いつの間にかほとんどの神学者が三位一体の神学者であると言っても過言ではないようになったとすら言われる⁶⁾。

このような神学が広く受け入れられた背景には、バルトやラーナーの指摘によって、啓蒙主義以降、西方神学から三位一体の信仰が見失われがちになり、また教会においても、とりわけ礼拝生活において三位一体の信仰がほとんど位置を持っていなかったことに気付かされたことがある⁷⁾。

三位一体論的神学の神学者たちは、多くの場合、カパドキアの教父の三位一体理解に注目した。彼らは、西方教会と東方教会の三位一体理解の間に重大な差異を見出し、西方神学において、神の三位性が十分に顧みられてこなかったと考え、その原因をアウグスティヌスの三位一体理解に見た。例えばパネンベルクは、アウグスティヌスが位格を位格間の関係によって、即ち「父は子に対してのみ父であり、子は父に対してのみ子」であること、そして聖霊が「父と子の交わりの帯」であることによって定義したことで、各位格は「他のものなしにはありえず、……他の位格との関わりにおいてのみある」ことになり、そ

6) コリン・ガントンは、『三位一体論的神学の約束 (The Promise of Trinitarian Theology)』第2版の序文に、「突然、私たち皆が三位一体論者であるか、そう思われるようになった」と記し、第1版の刊行から第2版出版までの間に神学の状況が大きく変わったことを示唆している。Colin E. Gunton, *The Promise of Trinitarian Theology*, Edinburgh: T&T Clark, 1991, 1997 (2nd ed.), p.xv.

7) 例えばイギリスにおいては、1983年から1988年にかけて、英国教会協議会 (British Council of Churches) の主催により「今日の三位一体論」と題する学習会が開かれ、その報告書は『忘れられた三位一体 The Forgotten Trinity』と題する3巻の書物として、各教会での学びのために刊行されたが、それは、三位一体論が神学においてだけでなく、各個教会のレベルでの関心事となったことを表している。cf. Christoph Schwöbel, 'Where do we stand in Trinitarian Theology', in: C. Chalamet and M. Vial eds., *Recent Developments in Trinitarian Theology: An International Symposium*, Minneapolis: Fortress Press, 2014, p.12; Colin E. Gunton, *Father, Son and Holy Spirit: Essays toward a Fully Trinitarian Theology*, London and New York: T&T Clark, 2003, p.3.

れは結局各位格の位格性を解消してしまうに至ったと指摘する。そして、バルトはその問題点を引き継いで、「位格」を「存在の様態（仕方）」(Seinsweisen)としてこの傾向を推し進めたというのである⁸⁾。

また、ガントンは、カパドキアの教父は一つのウーシア、三つのヒュポスタシスと呼び、プロソーポンをヒュポスタシスと言い換えることで存在論的な位格理解を持ったと指摘すると共に、アウグスティヌスが「私にはウーシアとヒュポスタシスの違いがわからない」と言って位格をペルソナと呼び、「ウーシアと区別されたヒュポスタシス」という理解を廃棄したことで、「互いの関係の中にある具体的個 (concrete particular)」としての位格理解が西方神学から失われることになったと指摘する⁹⁾。そして、関係を単なる論理的概念にしてしまうことで、位格の存在論的個別性が西方神学から失われ、三位格の現実性が失われ、一性の一面的強調に至ったとするのである。

そこで多くの三位一体論的神学者たちは、カパドキアの教父の三位一体理解に注目した。各位格を存在論的なものとして理解し、御業の主体として各位格独自の御業を記述することで、神学全体が三位一体論的であることを目指したのである。

彼らは同時に、東方神学の中に、ペリコレーシスの交わりによって三つのヒュポスタシスが一体となっているとの理解があることに注目した。特にガントンは、ジョン・ジジウラスの理解に注目し、「神であることは、交わりにあることである」と語った¹⁰⁾。そこから、とりわけモルトマンは、社会的三位一体と呼ばれる神学を主導した。そこでは、しばしば、この神の交わりの姿こそ神の像が見出され、この姿こそ人間本来のあり方の規定であり、従って教会や社会の規定であると考えられた。特にモルトマンは、社会に様々な連帯の形が生まれることに神の像の回復を見、ロバート・ジェンソンは、教会という共

8) ヴォルフハルト・パネンベルク『キリスト論要綱』（麻生信吾・池永倫明訳）、新教出版社、1982年、208-211頁。

9) C. E. Gunton, *The Promise of Trinitarian Theology*, 2nd ed., pp.41f.

10) 例えば、C. E. Gunton, *The Promise of Trinitarian Theology*, 2nd ed., p.39.

同体にこそ神の像の回復の姿を見出した。このように、三位一体論は、ある意味で「我々の社会のプログラム」¹¹⁾でもあるとしばしば見做されたのである。

2 三位一体論的神学への問題提起

2012年、スティーブン・ホームズは『三位一体の探究 (The Quest for the Trinity)』を出版し、このおよそ50年にわたるいわゆる三位一体論的神学は誤りであったと断じた。彼はこのように言う。「私は20世紀の三位一体論的神学の刷新を、その大部分において、教父時代、中世、あるいは宗教改革の三位一体理解に見られない概念や考えに依存しているとみている。ある場合には、確かに、過去の伝統によって誤っていると、時には正式に異端であるとすら、明示的にそして精力的に否定された点が、(現代の三位一体論的神学の議論には)ある」¹²⁾。そして、もし現代の三位一体論的神学の議論を肯定するなら、「我々は、神の永遠の生について主張してきたことについて、キリスト教の伝統の大多数が誤ってきたと結論づけなければならない」¹³⁾ ことになるというのである。

彼は、古代教父から宗教改革、そして近代に至る、様々な神学者の三位一体についての記述を見直し、その結果、アウグスティヌスも、カパドキアの教父も、それ以降の神学者もカルヴァンに至るまで、ニカイア以前の教父以来一貫して、神の単一性を守ることにこそ三位一体論の中心があったと結論づけた¹⁴⁾。特に教父たちは、「神性は単純で、非合成的で、言葉で言い表せない。そして繰り返し不可能で、『一つ』とただ厳密でない言い方で言う以外にな

11) Stephen R. Holmes, *The Quest for the Trinity: The Doctrine of God in Scripture, History and Modernity*, Downers Grove: IVP Academic, 2012, p.1. cf. Miroslav Volf, “The Trinity is Our Social Program”: The Doctrine of the Trinity and the Shape of Social Engagement’, *Modern Theology*, vol.14, 1998, pp.403-423.

12) S. R. Holmes, *The Quest for the Trinity*, p.2.

13) *ibid.*

14) Stephen R. Holmes, ‘Classical Trinity: Evangelical Perspective’, in: J. S. Sexton ed., *Two Views on the Doctrine of the Trinity*, Grand Rapids: Zondervan, 2014, p.39.

い」¹⁵⁾と一貫して教えたというのである。

三位一体論の神学者たちは、カパドキアの教父たちが御業の複数性を語っていると主張するが、ホームズによれば、教父たちの主張の中心は、その御業の統一性にこそあるという¹⁶⁾。つまり、三位一体は、イスラエルが他の神々を礼拝せず、ただ真のお一人の神のみを礼拝したにも拘わらず、キリスト者がキリストを礼拝することがそれに矛盾するものではないと確信したことを説明するために生み出されたものであって、従って、複数性ではなく一体性にこそその主張の中心があるというのである¹⁷⁾。

従って、いわゆる三位一体論の神学の神学者たちが、こぞって従来の西方神学を、神の実体における一体性に極端な強調を置いたと批判し、位格を個別実体的なものと思なそうとすることは、そして神の御業の一体性ではなく各位格の独自の御業について語ろうとすることは、ホームズによれば、明らかにそういった神学の伝統からの逸脱であることになる。

そして、教父たちは神の不可知性を前提し、父・子・聖霊の三位格を持つ神の単一性について、神はお一人であるという以外に説明することができないものと考えていたのであって、従って、現代の神学者がその神の一体性を理性的に説明できると考え、神を「交わりとしての神」と呼んで、ペリコレーシスの交わりによって神が一体であると語り、その交わりが単なる論理的なものではなく存在論的なものであると主張することもまた、教父の神学からの逸脱であるというのである¹⁸⁾。

さらに、カパドキアの教父たちがヒュポスタシスと呼んだ位格についても、そこに、個別性のような近代的人格理解を読み込むことは困難であり、位格の

15) S. R. Holmes, *The Quest for the Trinity*, p.199.

16) ホームズはこの点について、ルイス・エイヤースによるニュッサのグレゴリウスについての研究に負っている。それによれば、ニュッサのグレゴリウスの主張の中心は、御業の統一性にあったという。ibid., p.107.

17) S. R. Holmes, 'Classical Trinity', pp.32-34.

18) S. R. Holmes, *The Quest for the Trinity*, p.200; S. R. Holmes, 'Classical Trinity', pp.38-39.

区別はただ起源関係による区別のみしか教父たちは許さなかったとホームズは指摘する¹⁹⁾。そしてこの「ヒュポスタシス」はあくまで神の位格を表す言辞であって、またヒュポスタシス間の関係も神の内的生そのものであって、人間の人格にこれを適用することはできないという²⁰⁾。

さらに言えば、神を人格的な神と言うのであれば、神は一つ的人格としての神であって、父・子・聖霊それぞれの人格性を肯定することはできないともいう²¹⁾。

こういった考察の上で、ホームズは最終的に、「私たちは、これまでしてきたことを『三位一体論の再興』と呼んだ。しかし、将来の歴史家たちは、何故(そう呼んだのか)と問うかもしれない²²⁾と結論づけるのである。

このような、三位一体論的の神学への疑義は、ホームズに限ったものではない。サラ・コークリーは、次のように、三位一体論的の神学に関して三回の波があったと整理している²³⁾。

それによれば、第一の波は、ウラジミール・ロースキーが、テオドール・デ・レグノンの論を取り上げ、東方神学と西方神学における、三位一体理解の違いを指摘したことに始まるという。彼は、東方神学では三位格から一体性の方向で考え、西方神学では一体性から三位格の方へと向かう傾向にあるとした²⁴⁾。そして、その同時期に、カール・バルトが、三位一体こそ神学の根幹であると語り、さらにその影響を受けたカール・ラーナーが、神の三位一体性は神の御業に現れると主張したことで、三位一体論は注目を浴びることになる。

19) S. R. Holmes, *The Quest for the Trinity*, p.200; S. R. Holmes, 'Classical Trinity', p.38.

20) S. R. Holmes, 'Classical Trinity', pp.38-39, 47.

21) S. R. Holmes, *The Quest for the Trinity*, p.200.

22) *ibid.*

23) Sarah Coakley, 'Afterword: "Relational Ontology", Trinity, and Science', in: John Polkinghorne ed., *The Trinity and an Entangled World: Relationality in Physical Science and Theology*, Grand Rapids and Cambridge: William B. Eerdmans, 2010, pp.185-194.

24) *ibid.*, pp.186-187.

しかし、コークリーによれば、それでもバルトやラーナーは、位格に person という、人間の人格をも表すようになった語を用いることを躊躇したという²⁵⁾。実際、バルトが、Persönlichkeit という語を用いることで、位格が人格のように理解されることを嫌い、Seinsweise (存在の仕方) という語を用いたことはよく知られている。また、ラーナーも、person という語を用いることをやめることはなかったが、やはり同様の懸念を表明している。

第二の波は、ジョン・ジジウラスによる、東方教会と西方教会の三位一体理解の差異の指摘により始まったとコークリーは見る。コークリーによれば、ジジウラスは、「関係として理解されるものとしての『位格性』が優先されることは、既に4世紀後半のカパドキアの教父たちの文書に示されており、この立場は、アウグスティヌスが実体を優先させたことと明らかに一線を画している」と主張した²⁶⁾。とりわけ、カパドキアの教父由来とジジウラスが言う、関係における位格の統一性の理解が、個人主義的に理解された西欧の位格概念、また人格概念とは異なることを強調した。

コークリーによれば、この三位一体論的神学の第二の流れを決定づけたのは、コリン・ガントンがこのジジウラスの理解を全面的に受け入れ、展開させたことであるという²⁷⁾。この流れに乗る神学者たちは、個別実体的に理解された位格が、交わりによって一つとされていると考え、そしてこの交わりを存在論的なものと考えた。

さらにジジウラスは、この両者の相違が、東方と西方の教会論の相違にもつながっているとしたが、それもそのまま受け入れられ、いわゆる社会的三位一体の議論を生んだという。もっとも、こういった主張は、近代の行き過ぎた個人主義の克服を意図してのものであったとコークリーらは見る²⁸⁾。

そして、近年、第三の波が起こっていると言い、コークリーは自らをもそこ

25) *ibid.*, p.188.

26) *ibid.*, p.189.

27) *ibid.*, pp.190-191.

28) *ibid.*, p.190.

に位置づける²⁹⁾。それは、教父の文書に立ち戻り、再度検証することで、まさにホームズがしたように、ジジュラスやガントンによる教父神学の理解が大きく誤ったものであることを指摘する流れである。彼らは特に、4・5世紀の三位一体論の形成期における、東方と西方の相違の主張に疑義を唱え、ニカイア以前との連続性に注目し、両者には、もちろん多少の相違はあるにしても、神の単一性の強調という点で一致があったことを重視するという。そして、カバドキアの教父や、その同時代、また継承者たちの文書そのものを、再度新たに読み直すことで、これまでの第二世代の者たちの試みを疑義に付し、三位一体論的神学そのものを大きく見直すというのである。

3 三位一体論的神学の行方

(1) 三位一体論的神学の課題

ホームズやコークリーによって三位一体論的神学が根拠としている教父神学の誤解が指摘され、三位一体論的神学への疑義が提起されて既に10年以上が経過している。

もっとも、コークリーは、いわゆる三位一体論的神学の第二世代の主張がジジュラスの教父理解に依存しているとするが、それは必ずしも正確ではない。例えばパネンベルクは、『キリスト論要綱』において既に東方と西方の位格理解の違いを指摘し、ペリコレシスの教理にも触れたが、その際に、彼はジジュラスを参照していない。また、ガントンのアウグスティヌス批判は、バルトの影響を受けているとの指摘もある³⁰⁾。従って、コークリーの主張は、三位一体論的神学の系譜を余りに単純化しているように思われる。

ただ、確かに、三位一体論的神学の主張には、時に危うさがあったことも事

29) *ibid.*, pp.191-192.

30) Andrew Picard, 'Towards a Living Sacrifice of Praise: A Critical Evaluation of Colin Gunton's Trinitarian Theology of Culture', Ph.D diss., University of Otago, 2021, p. 94. cf. Colin E. Gunton, *Becoming and Being: The Doctrine of God in Charles Hartshorne and Karl Barth*, 2nd ed., London: SCM Press, 2001, pp.225-232.

実であろう。

例えば、西方神学の三位一体論をアウグスティヌスに代表させ、西方教会では一貫して、神の一体性、あるいは一なる実体が強調されて、三位格の実際的な区別が軽視されてきたとされることがある。特に、「三位一体の外に向かつての御業は分けられない (opera ad extra Trinitatis sunt indivisa)」の強調によって、神の内的生における位格間の御業以外については、御業の一体性が強調され、各位格の御業が十分に語られてこなかったかのように言われることがある。

しかし、西方神学の歴史において、例えばカルヴァンは「御父には行為の起源、そして全ての事物の起源と源泉とが帰され、御子には知恵と計画と、全ての事物の秩序づけられた配列が帰され、しかし聖霊には、その行為の力と効力とが割り当てられる」³¹⁾と記し、神の御業における各位格の役割に言及している。また、カルヴァンは、しばしば「聖霊の神学者」と呼ばれるほどに、聖霊の働きに注目している。もっとも、カルヴァンはここでカパドキアの教父を明示的に参照してはいないが、1世紀後のイングランドのピューリタンであるジョン・オーウェンは、カパドキアの教父を明示的に参照しつつ、同様のこと、即ち、全ての神の御業において三つの位格の全てが常に働いているが、それぞれの位格が「存在の仕方の秩序によって働く」のであること、そして御父は起源因、御子は獲得因、聖霊は作用因と呼ぶことができることを語っている³²⁾。つまり、いわゆる「カパドキアの教父の三位一体論」が西方教会に何の影響も及ぼしてこなかったのではないし、常に「アウグスティヌス的」な、御業における位格の区別を認めない神学が展開されてきたのでもない³³⁾。

31) カルヴァン『キリスト教綱要』I.13.18.

32) John Owen, *Pneumatologia, or A Discourse concerning the Holy Spirit*, 1674, in: W. H. Goold ed., *The Works of John Owen*, vol.3, pp.91, 94, 158. 特に、聖霊は、御父と御子とから発出したため、御父と御子に栄光を帰すように、御父の目的のために、そして御子の御業を一人一人に適用するために働くとされる。

33) ガントンは、明らかにこのカルヴァンとオーウェンの例を認識している。cf. C. E. Gunton, *Father, Son and Holy Spirit*, pp.51, 85.

また、例えばパネンベルクやモルトマンの「位格」理解には危うさがある。彼らは位格を「御業の主体」と語った。その観点から、例えばパネンベルクは、創造における御子の御業を、御子独自の、主体的なものでなければならぬとして、御子の御父からの自己区別を語った³⁴⁾。しかし、同じ三位一体論的神学者であるガントンは、このパネンベルクの理解を、「余りにも自律的で自発的過ぎる」³⁵⁾と批判した。

それは、御業における各位格の独立性を語るとしても、その一体性をどのように確保するのかということでもある。そして、従来の三位一体論的神学は、この御業の一体性を語ることに課題を抱え続けてきた。

カール・バルトはフィリオクエを維持し、聖霊をキリストの霊とし、「御霊は、イエス・キリスト御自身の現臨と活動以外の何ものでもあり給わない」、また「聖霊は、いわばイエス・キリストの伸ばし給うた腕であり、その甦えりの力における（その甦えりにおいてまたその甦えりと共に始まり、そこから働き続ける、啓示の力における）彼御自身であり給う」³⁶⁾と語ること、御子と聖霊の働きの一体性を確保しようとした。但し、これでは聖霊が御子に従属しすぎていて、「聖霊の独自の働きの現実性」が毀損していると批判されることがある³⁷⁾。

ガントンは、「聖霊というお方を特定するには、キリストにおける神の御業と分かたれることなく、しかしそれに還元されてしまうことのない、神が我々にそしてご自分の世界に働かれる仕方があることを示さなければならない」³⁸⁾と語り、各位格の絶対的独立性ではなく、「相対的独立性」を主張し

34) Wolfhart Pannenberg, *Systematische Theologie*, Bd.2, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1991, S.45.

35) C. E. Gunton, *Father, Son and Holy Spirit*, p.72.

36) カール・バルト『教会教義学』「和解論」II/2（井上良雄訳）、新教出版社、1966年、300頁。

37) 例えば、Colin E. Gunton, 'Barth, The Trinity, and Human Freedom', *Theology Today*, vol.43, No.3, 1986, p.329.

38) Colin E. Gunton, *Theology through the Theologians: Selected Essays 1972-1995*,

た。特に、エイレナイオスに倣って、御子と聖霊を「御父の二つの手」と表現し、御父の御業を御子と聖霊が媒介すると語った³⁹⁾。けれども、それでは、御子の働きと聖霊の働きとの間の直接の関係を語っていないことになり、果たして三位格の御業の一体性を語れているのかどうか、疑問が残る。

さらに、神の一体性を交わりで理解する主張は、いわゆるペリコレシスの教理に基づくが、そもそもペリコレシスの教理がいつどのように発生したのか、はっきりとしない。トマス・トーランスは、ペリコレシスに類似の思想が既にアタナシウスにあったと言うが、それはペリコレシスそのものではない⁴⁰⁾。

また、交わりによる統一は、あくまで統一であって、ウーシア、即ち本質あるいは存在の単一性と同一であろうか。ジジウラスは、交わりは存在論的概念であると言い、ガントンもそれを肯定するが、果たしてそうであろうか⁴¹⁾。

このペリコレシスの交わりによる神の一体性の理解は、社会的三位一体の主張の基礎にあるものであるが、この神の交わりの姿が、社会や教会のあり方のモデルになるとの社会的三位一体の主張は、根拠がはっきりしない。例えば、ガントンは「異なる三位一体理解は異なる教会理解を生み出す」と語り、西方教会の教会論を、「アウグスティヌスの[三位一体論の]概念に対応して、ある意味で、見える共同体の具体的な歴史的関係性より先に教会存在があるとする教会論」と評した⁴²⁾。そして、それに対し、共同体としての教会理解をもつ教会論を形成するためには、「神は父・子・聖霊が互いに与えまた受け取

Edinburgh: T&T Clark, 1996, p.112.

39) C. E. Gunton, *Father, Son and Holy Spirit*, pp.79-80.

40) Thomas F. Torrance, *The Christian Doctrine of God: One Being Three Persons*, Edinburgh: T&T Clark, 1996, p.185.

41) John Zizioulas, *Being as Communion: Studies in Personhood and the Church*, London: Darton, Longman and Todd, 1985, p.134; C. E. Gunton, *The Promise of Trinitarian Theology*, p.71.

42) Colin E. Gunton, 'The Church on Earth: the Roots of Community', in: C. E. Gunton and D. W. Hardy eds., *On being the Church: Essays on the Christian Community*, Edinburgh: T&T Clark, 1989, pp.70ff.

るものによって神ご自身が規定されるというカパドキアの教父たちの教え」が必要になるとした。しかし、共同体としての教会の意識を強く持った自由教会の教会論を生み出したピューリタンであるジョン・オーウェンは、ペリコレーシスによる神の一体性という理解を持っていない⁴³⁾。

また、ミロスラフ・ヴォルフも同様の主張をするが⁴⁴⁾、何故三位一体論の形態に対応した教会論が生み出されるのか、その理由を明確に説明することはできていない。特に、ホームズも指摘するように、神の内的生における交わりと、被造物の交わりとを、どうして結びつけて論じることができるのか、疑問が残る⁴⁵⁾。

さらに、社会的三位一体の主張においては、この交わりとしての神のお姿が、神の像と重ね合わせて理解されることが多くあるが、そこにも疑問がある。つまり、神の内的生における交わりと、人間の交わりとを結ぶものとして、人間が神の像として造られたことが取り上げられることになるが、神の像について古代教父以来様々な議論がなされてきた中で、何故この内在的三位一体の姿が神の像であると言えるのか、はっきりと説明することは困難であるように思われる。

(2) 三位一体論的神学の可能性

近年、例えばブラッドリー・グリーンヤルイス・エイヤースらによって、ガントンの教父理解の誤りが厳しく指摘されるようになった⁴⁶⁾。確かに、ガン

43) 拙論「ジョン・オーウェンの三位一体論的神学における自由の理解—キリスト者の自由とその教会論並びに寛容論への影響—」博士論文、東京神学大学、2013年、137頁。

44) Miroslav Volf, *After our Likeness: The Church as the Image of the Trinity*, Grand Rapids and Cambridge: William B. Eerdmans, 1998.

45) ヴォルフは、「三位一体の秘義は、ただ神存在の中のみ見出されるものであり、被造物の中にはない」と言いつつ、「『父・子・聖霊の名による』洗礼を通して、神の霊が信仰者を三位一体の神との交わりと、教会の交わりの両方に導く」のであるから、この二つの交わりの間にはある一定の関係があるはずであるとしている。ibid., pp.191-195. cf. 拙論「ジョン・オーウェンの三位一体論的神学における自由の理解」136頁。

トンは、アウグスティヌスを余りに単純化し、またカパドキアの教父についても余りにジジウラスの理解をそのまま受け入れすぎているかもしれない。そして、ジジウラスによるカパドキアの教父理解も、コークリーをはじめ、多くの神学者によって誤りが指摘されている⁴⁷⁾。

それなら、これまでの三位一体論的神学の試みは、全て誤りであるとして廃棄されるべきであろうか。そうではないように思われる。

グリーンは、ガントンのアウグスティヌス理解の誤りを指摘しつつ、しかしそれによって「ガントンの神学研究全体に反対し、批判するつもりはない」とも言い、ガントンの神学そのものが無意味になるのではないと指摘する⁴⁸⁾。とりわけ、ガントンの、近代の諸問題に対し神学的に答えようとする姿勢を、彼は高く評価する。また、クリストフ・シュベールも、これまで三位一体論的神学者がしてきたことは、「三位一体論的神学を教会や学問的神学における神学的省察の領域として確立しようとする、『計画の段階』であった」のであり、その試み自体が直ちに廃棄されるべきではないと指摘する⁴⁹⁾。特に、組織神学はそもそも三位一体の神について扱うものであって、「神とはどなたか」、「神は内在的三位一体においてどのようなお方であるのか」、そして「神は被造物との関わりにおいてどのようなものであるのか」という、そこで問われた問

46) 例えば、Bradley G. Green, *Colin Gunton and the Failure of Augustine: The Theology of Colin Gunton in Light of Augustine*, Eugene: Pickwick Publication, 2011; Lewis Ayers, *Augustine and the Trinity*, Cambridge and New York: Cambridge University Press, 2010; Lewis Ayers, *Nicaea and Its Legacy: An Approach to Fourth-Century Trinitarian Theology*, Oxford: Oxford University Press, 2006 など。

47) 例えば、Sarah Coakley, “Persons” in the “Social” Doctrine of the Trinity: A Critique of Analytic Discussion’, in: S. T. Davis, D. Kendall and G. O’Collins eds., *The Trinity: An Interdisciplinary Symposium on the Trinity*, Oxford: Oxford University Press, 1999, pp.123-144 を参照。

48) B. G. Green, *Colin Gunton and the Failure of Augustine*, pp.201-206.

49) Christoph Schwöbel, ‘Where do we stand in Trinitarian Theology’, in: C.Chalamet and M. Vial eds., *Recent Developments in Trinitarian Theology: An International Symposium*, Minneapolis: Fortress Press, 2014, p.36.

いは誤っていないと言う⁵⁰⁾。

例えばガントンの神学は、ただアウグスティヌスの三位一体理解を述べたものではなく、アウグスティヌスの影響を受けたと思われる現代の神学傾向を指摘し、その問題の解決策を提案しようとするものであった。つまり、現代の神学において、例えばカール・バルト以前の神学において、神の単一性が一面的に強調されて三位一体の神の三位性が著しく損なわれていること、そして、神が三位一体の神であることに注意を喚起したバルトにおいても、なお聖霊の具体的な働きが十分に記述されていないように思われることを指摘し、それがアウグスティヌスの三位一体論以来の課題であると述べたに過ぎない。ガントンが問題にしたのは、アウグスティヌスの神学であるよりは、現代の、三位一体が忘れられた教会の状況であり、神学の状況であった。従って、彼がアウグスティヌスの神学を誤解したと指摘されることは、必ずしも、彼の神学の試みそのものを否定するものではない。

ガントンはそこでカパドキアの教父への回帰を提案するが、カパドキアの教父が実際には神の単一性を主張し、神の御業の一体性を主張したのだとしても、神の御業における位格の区別を認めていることに注意する必要がある。もちろん、カパドキアの教父の最大の関心事は、ホームズが指摘するように、神の御業の一体性であった。当時、御業の違いは、本質の違いを意味したからである⁵¹⁾。G. L. プレスティージの「カパドキアの教父たちの思想の根底にあるのは、対等なヒュポスタシスの三重性であって、神のウーシアの同一性については彼らの思いにおける重要性としては二の次になっていた」⁵²⁾との主張に対し、ジョン・マッキンタイアは既に1950年代に、カパドキアの教父にとって「ウーシアの同一性は、(議論の)順序として二番目に論じられているが、重要度で二番目であるのではなく」、「この同一性こそ、彼らの議論の結論であ

50) *ibid.*, pp.69-71.

51) Basil of Caesarea, *Epistles*, 189.6.7. 但し、これは通常、ニュッサのグレゴリウスの作であるとされる。

52) G. L. Prestige, *God in Patristic Thought*, London: William Heinemann, 1936, pp.242f.

り、到達地点であり」、[彼らの思想の根底にあるもの]であることを明らかにしている⁵³⁾。しかし、そのマッキンタイアは同時に、カパドキアの教父たちは、神の御業が一体的であることを、「区別できないこと」とは理解しなかったとも指摘した。

だから実際、ニュッサのグレゴリウスは、「全ての行為は御父に由来し、御子を通して進められ、聖霊において完成へと導かれる」⁵⁴⁾と記したし、カエサリアのバシレイオスも、天使の創造について、「奉仕する霊は御父の意志によって存在し、御子の働きによって存在へと導かれ、霊の現臨によって完成させられる」⁵⁵⁾と語った。つまり、各位格の御業の区別を認めた上で、それらが何らかの秩序、具体的には位格の起源関係に対応する秩序に従っているとすることで、その一体性を語ろうとしたのである。

確かにカパドキアの教父は、位格の御業の一体性を語ろうとした。しかし、ガントンが目の前にしていたのは、その位格の御業の区別が曖昧にされている状況であり、「三位一体の神の外に向けての御業は分けられない (*opera Trinitatis ad extra sunt indivisa*)」が極めて厳格に理解される状況であった。そうであれば、そこで、カパドキアの教父が前提にしていた位格の御業の区別を語ることは、決してカパドキアの教父の三位一体理解からの逸脱ではない。

自由教会である日本の教会にとって、教会を形成する信仰者の自発的な業を肯定的に語ることは、重要な課題である。しかし、人間の全的墮落を認めつつ、教会を形成する信仰者の自発的な業を語り、かつ、教会がエクレーシア、即ち神に呼び集められた者の群れであることを同時に語るためには、信仰者を再生し聖化する聖霊の働きが生き生きと語られる必要がある。信仰を与え、信仰者を造りかえ、自由を与えるという、聖書に記された聖霊の働き、それも聖霊にしかなし得ない働きをはっきりと語るためには、三位一体の神の御業にお

53) John McIntyre, 'The Holy Spirit in Greek Patristic Thought', *Scottish Journal of Theology*, vol.7, 1954, p.358.

54) Gregory of Nyssa, *quod non sunt tres dei*.

55) Basil of Caesarea, *de spiritu sancto*, 16.38.

ける位格の区別を語るができなければならない。

但し、各位格の御業の区別を語った上で、その御業が一体であることをどのように説明するのが、重大な課題となるであろう。聖霊は三位一体の神の一位格であって、従って、御父と御子と共に、私たちに救うために一体的に働かれる。その御業の一体性を語る際に、上述のように、カパドキアの教父が起源関係に基づく位格の御業の秩序を語ったことは、大きな参考になるであろう。彼らは、その秩序を語ることで、各位格の御業が一体的になされるものであることを示そうとしたからである。そしてそれは、西方神学においても、既にカルヴァンが語り、ジョン・オーウェンが語ったことでもある。

もっとも、位格とは何かは、神の秘義に属することであって、説明困難な問題である。カパドキアの教父やアウグスティヌスが位格をどのように理解したのかについては、ジジウラスやガントンの理解の誤りが指摘される中であっては、歴史神学者の徹底した研究を待つしかない。

但し、いわゆる社会的三位一体については、慎重に扱う必要がある。一方で、神が創造主である限り、神が他ならぬ三位一体のお方であることが、被造物の存在やあり方に、何らかの影響を与えていると考えることは誤りではないだろう。その意味で、三位一体論は、ただ神の内的生や御業についての教理であるだけでなく、社会全体に関わる教理であると言える。しかし、既に述べたように、ペリコレシスの交わりによって三位格の一体性を理解するのが適切であるのかどうかは、疑問が残る。また、どうしてその交わりのお姿が、教会や社会のあり方の原型となるのか、はっきりとしない。むしろ、特に教会を三位一体的に記述するとは、交わりという教会の形態と三位一体の神との関係を語るのではなく、教会という共同体が、どのように父・子・聖霊の一体的な御業によって形成されるかを語るのではないだろうか。

おわりに

20世紀後半に華々しく展開された三位一体論的神学は、21世紀に入り、重大な疑義を提げられることになった。しかし、これまで半世紀にわたって続け

られてきた営みは、その全てが否定されるべきものではない。

神が父・子・聖霊なる三位一体の神であることにこそ、キリスト教信仰の特徴があり、私たちが出会う神は、他ならぬこの三位一体の神である。その父・子・聖霊なる三位一体の神がどのようなお方であり、何をどのようにして下さっているのかを語る三位一体論的神学の探究は、まだ始まったばかりであるのかもしれない。

(すだ・たく)